逃げ道なのかもしれませんけれど、執行部がタイトルを考えるからダメなんだ、クラスの皆にアンケートをとろうということで、全校生から募集したんです。

「WE CAN」はある生徒の案で、「無限の可能性への挑戦」はこっちが勝手にサブタイトルをつけたんです。とにかくもっと枠を広げて、親しみやすいテーマにしよう、クラスとの溝を埋めようというのでこうなってしまったのです。結果から言うと、やはりお祭で終わってしまったというのは大きな反省点だと思います。

高木　この36回記念祭の記念講演会の講師はどなたでしたかね。

伊塚　国立民族博物館の福井先生です。

高木　テーマが「思考の多様性を求めて」でしたが、これについて何か記憶に残ってますか。

伊塚　私が担当だったんですが、内容がちょっと堅かったというか、難しかったし、専門的になりすぎたんですね。ただ、先生自身のオーソリティーがすごかったので、すごい先生を呼んだという自己満足はあったんですけど、芦高生には浸透しなかったのではないでしょうか。

高木　それぞれ自分の代の講演会がこうだったという思い出がありましたら。宮尾さんいかがですか。

宮尾　私の代の記念講演会は、できる限り芦高生であった方を選ぼうという方向で進んでいたのですね。芦高を卒業された方なら記念祭の趣旨も理解して話していただけるんじゃないかと思っていたんですけど、どうしても今までされた方と重複したりするので、ちがう方向にも向いてみようということになりました。そこで京都の伏見工業ラグビー部の山口良治先生に、芦高もラグビー部が強い方向に向っていたものですから、おいでいただこうということになりました。ラグビーの青春という方面から話していただけまして、良かったんじゃないかなと思うんです。生徒の方からも共感したという声も多く聞かれました。

高木　そういう意味では非常に講演会が成功したということですね。

宮尾　そうですね。講演会はあまり好きじゃなかったんですけど、好きになりました。(笑)

高木　他の代ではいかがですか。自分の代の講演会の思い出あるいは生徒の反応が良かったなど。山本光一君、今年はどうだったんですかね。

山本　僕は記念祭を2回しましたが、2年の時の講師の先生には福井達雨先生。滋賀県で知恵遅れの方の学校で理事兼校長をされている方に苦労話とか、それに関係して自分の息子さんに対する接し方とかについて話していただきました。その時は講師の先生が決まらなくて、2・3あたってみても僕らが思っているよりも大人のスケジュールは簡単ではなかったのですが、タイミングよく福井達雨先生に快く引き受けてもらいました。この講演会は、まずまず成功したと思います。

41回の初めての6月の記念祭の講師に建先生にお願いしました。理由は、僕らも芦高のOBの方にお願いしようという伝統が残っていました。記念祭が6月になって新しくなるということで、古いものをもう一回見直そうと思ったわけです。建先生ならば芦高のことはよくわかって下さっているだろうということで建先生をお招きしました。昔の記念祭とか授業とかについて今との違いを話していただきました。生徒のウケの方は賛否両論という感じでしたね。話の内容はテーマに沿った良い話が聞けたのではないかと思います。

60年代初めの記念祭

高木　それではですね、60年代から今年の平成元年までの各代の会長さんや他の方もお見えですから、順を追って全体的なお話しをうかがうとして、そのあと行事ごとにもう一回振り返ってみましょう。それでは山下さん、昭和60年代初の記念祭について語ってもらいましょう。

山下龍　僕らの年は会長自らごたごたがあって、全体的にはまとまりのない執行部でした。記念祭はテーマと中身が全然違っていたような気がします。それで、内容的には今までのことを継承してきただけに終わったと思います。

高木　テーマとのギャップの話ですが、山下雪絵

さんどうですか。

山下雪　これは今の執行でも言えるかもしれないですけど、執行内で１つのものをやるという意識よりも、その時は自分に与えられた任務を遂行するのに必死だったというわけです。例えば、山下君は装飾をやってましたよね、そうすると彼は装飾の方で必死だったのを覚えているんですよ。青木志津子さんが講演の担当で彼女もそれしか見えてなくて、私も当然文化部公演のことしか見えていないという状態で、執行の中で何か１つのことをやっているというのがなかったと思うんですね。そういう意味でもテーマからずれてしまったのだと思います。バラバラというより、お互いの連絡がなってなかったと思います。

山下龍　全校生の記念祭に対する情熱がこの頃はほとんどなかったと思います。安藤さんの話を聞いてますと、まだ代議員が積極的に応援してくれたという話もありましたが、僕らの代くらいから無関心という時期に入ってきたと思います。

永田　いつの代でも言えていることだと思うんですが、僕らの代の時でも皆が協力してくれたわけでもないし、かなり仲良かった子しか協力してくれませんでした。

山下雪　記念祭のテーマがあってもお祭感覚になっちゃっていたと思いますよ。だから参加する人はすごく参加するし、参加しない人はしないというようにはっきり分かれちゃった。テーマが堅すぎたら皆離れていっちゃうというのがあるので、特に自治会展示などは担当の人はしんどかったと思いますよ。今も一緒じゃないですか。

高木　テーマがどれだけ自治会員に浸透してるかというのが鍵を握っていたようですが、宮尾さんの代の「ＴＨＥ　ＥＡＲＴＨ」というテーマは非常に大きなテーマの感じがするんですが。

宮尾　そうですね、今までのテーマを見ていると生徒自身がイメージし難い面もありました。「THE EARTH」＝「地球」という一言は、みんながつながっていける部分がたくさんあって、考え易いんじゃないかなと思って出してみたんです。
実際はテーマを執行で決めるか、生徒全員から出すのか、いろいろ考えたのですが、結局生徒全員から集めることになったのです。実はこの時僕は１年Ｉ組の指導委員をやってまして、僕が出したテーマなんです。それがめぐってきて、結局代議員と執行委員の所まで残ってきて、会議の結果これを代議員におろして全員におろしたという形でこれが通ったのです。だから、テーマという面から見てもあまり生徒に浸透しているとは言い難かったと思いますね。

高木　宮尾さんの代には「ＣＦ」というのがありますね。他の記念祭とは少し違うような感じなのですが、これはどのような内容ですか。

宮尾　「CF」というのはCulture Festivalの略ですね。山下龍郎さんの代の時も、途中までやってらしたのは森中会長ですが、僕もあまり会長として大きなことは言えない身分なんですが、ちょっと全体がちぐはぐしてました。後半は山下龍郎会長がまとめあげたという感じで、とりあえず執行の中身から建て直そうということで、山下さんの時には執行委員会室の壁の塗り替えとか机の交換とかをされました。私もとりあえず執行内のまとめあげから、それをもとにして上にあがっていこうと考えました。
記念祭も今までと違った新しいカラーを出さなければと考えました。ちょうどその時、９月か10月頃から新しく体育館を建て直すということがあったんです。それで、この記念祭が体育館最後にあたるということがラッキーしまして、特に体育科関係の先生方から協力を得ましてこの「CF」＝Culture Festivalが成立したんです。内容の方は今まで記念祭と言うと堅い部分が生徒の方から感じられていましたので、ちょっと近付いた雰囲気を出そうと思いました。そこで体育館でバンドの演奏をやってもらったり、運動部の考え方を発表してもらう弁論大会をやってもらいました。最後には先生方に合唱していただきました。このCulture Festivalというのは良かったなあと僕は思っています。

高木　ありがとうございました。灘井さん、あなたは宮尾さんの時の副会長、そして40代の会長と２代にわたって自治会のリーダーとして活躍されたのですが、宮尾会長の時の経験を生かしてあなたの代に行った記念祭、これが目玉だというようなもの何

かございましたか。

灘井　副会長時は宮尾さんの下で自分から能動的には動けないけれど、言われることならやるという感じでした。会長になった時もそういう色合いがあって、高須さんと佐藤君が同じ39代にいましたから、彼らの力に頼るというのはあったと思います。

39回の記念祭のテーマは「OUR DREAMS」ですが、それ以前の記念祭は過去の出来事であるとか、現在起こりつつある諸問題について触れたものが多かったのですが、未来に望む夢について考えていこうじゃないかという意味で「OUR DREAMS」としたのです。

この年体育館が使えなかったんですね。それに、日程的にも真中に秋分の日が入っていたんです。休みは休みとして別にやると日程が6日間になってしまうわけです。この際だから思い切って4日にしてしまえという案も出てました。代議員会にかけた時に私が必死に説明したにもかかわらず、4日案は満場一致で否決されました。

水野　ちょっと補足したいのですが、4日案というのは12月に体育館の竣工式がありましたから、それを1年前の代の「CF」という感じにして4日案にしてはどうか、というのが執行部原案になったわけです。

灘井　結局最終的に6日案、休みを入れて6日ですから内容としては5日なんですが。「OUR DREAMS」というテーマを自治会展示として各クラスがどのように展示してくれるかある意味では期待していたのです。その時の担当が高須さんだったのですけど、非常にひどい状態だったのですが、その辺はどうですか。

高須　まずこの時は記念祭に対する代議員のやる気が全然なかったんですね。だから、会長が何日案にするという説明をする時もわかろうとしないし、言ってもわかってくれなかったり、代議員会にも出てくれない状態でした。文化部展示に対するプリントなどにも勝手なことばかり書いてくるというのが多かったので、提出のプリントの下に先生の目を一度通してもらうための印鑑欄を設けたりして、こんなのだったらもう記念祭じゃないというくらいまで取り締まりみたいな感じになってしまった。

内容は結局「OUR　DREAMS」。後で考えるとかなりやりにくいテーマだったんだなあというのもあったんですけど、すごい貧相な展示だったと思います。

灘井　僕の代でどういう特色があったかと言われた場合、自信を持ってこれだと言えないです。

水野　体育館がなかったという特殊事情で、4日案・3日案・5日案とかいろいろ出ました。結局、講演会と映画会に西宮のアミティホールを使いました。文化部公演のルナ・ホールと合わせて2つのホールを使いましたので、予算をたくさん使ったんじゃないかなと思っているんですよ。映画会は本格的な「砂の器」という名作でしたので、良かったんじゃないかなと思います。

高木　「OUR DREAMS」という62年の記念祭では特に日程の所で大変ご苦労があったみたいですし、それから水野さんからお話がありましたけれど、苦労したけれども好評な行事もあったというお話でした。そして、40回の昭和63年は「絆－芦高生にないものを求めて－」、41回の今年の6月21日から25日の「革新－終焉そして誕生－」と現在の山本光一君の代に来たわけなんですが、2年続けてやってみてどうでしたか。その辺の苦労話を…

山本光　記念祭の行事内容はともかく、どういう状況にあったかというと、先程、山下龍郎先輩や山下雪絵先輩や高須先輩、灘井先輩が言われたように、もうだいぶ一般生徒、代議員の記念祭に対する寄りが悪くなっているというのがピークに達してました。そういう内実にもかかわらず、記念祭自体は土台はしっかりしているから、それを超えて良いのができて当り前というプレッシャーを僕らは感じてました。記念祭の発展についてこちらに並んでおられる諸先生方からかなり言われまして、どうしようかと悩んでいたのを覚えています。

寄りが悪いという環境なんですけど、文化部公演、文化部展示は最近活発ですが、そのかわりに自治会展示が足腰が立たなくなってきています。僕らは文化部展示、文化部公演は放っておいてもやりおるやろうということで、自治会展示に力を入れました。そこで、お祭騒ぎではいけないんじゃないかという

ことですが、お祭にもならないような悲惨な状況というのがありましたから、お祭でもちゃんとしたお祭りをしたいと考えました。
かなり記念祭というのが衰退している時期に僕らの時期があったものですから、レベルの低い話ですけれど、こっちからレベルを下げて後ろから押すような形にしようというのが僕の考え方でした。
「絆」というテーマなんですが、最初僕は「宝島」というテーマを出しました。皆に受け入れられ易いんじゃないかなあと考えたのですが、幼稚なんじゃないかと否決されてしまいました。結局、「絆」になったのですが、何の「絆」かというと、代議員とかそういう関係でもっと交流を深めていい記念祭にしたいなあと願い、「絆」を考えました。

平井　僕は39回から41回まで３年間とも執行委員として記念祭をやってきました。自治会展示の質の悪さとか、一般生徒が参加しないということがありました。39回は文化部展示と自治会展示が同じ日で、40回は分かれているんですよ。41回ではもう一回くっつきました。僕らは40回で文展と自展を離したら盛りあがるんではないかということでやってみました。結果はぐちゃぐちゃでした。自展１個ではもたないんじゃないかという状態まで来ていました。自展の単独日程を復活させなければいけないなと思っていたのですが、僕らの代でできなかったのが心残りで今でも悔やんでいるのです。現役がいろいろと考えてやってくれると期待してます。

６月記念祭の実施

山本　40回の記念祭も無事に終わり、そのあと執行部はしばらく何もないですよね。その時期に過去の記念祭に関係することを読んでいたら昔から時期の変更とか春秋分離案とかの意見が出ていたということが分りました。そこへ、そろそろ真剣に考えてみようじゃないかという話が生徒課の先生からもちあがりました。そこで一つ考えて腰を上げてみようということで、僕らの代から話し合うことになりました。
なぜ変えたかという趣旨は、生徒課の先生と僕の見解ではかなり違っているのですが、１つは記念祭が終ったあと、「受験が控えてなかったらもっと楽しくできたのに」という声を３年生の先輩から、１年の時も２年の時も聞いてました。特にギター研は時期が早かったらもっとちゃんと練習ができたのに、このままではいい参加が望めないという意見がありました。２つには、自治会展示にしても、３年生は一番力があるにもかかわらず、推薦入試等の関係で十分記念祭に力が入らない、けれどやりたいしなど進路に支障をきたしながら記念祭にも支障をきたすというどっちつかずの記念祭をやっていました。その他にクラブも足腰が立たなくなっていました。運動部は活発なところは活発なのですが、文化部特に展示系に関してはちょっとしんどいなあというのがありました。時期が変わったら何か変わるんじゃないかなあ、という安易な考え方で変えてみました。
最初は、危険すぎるということで、執行では11対１で負けてしまったんですが、得意のわがままで「一株一票や。株主や」と押してしまいました。刺激が欲しかったんですね。たまたまうまくいったからよかったようなものの、これでちょっとしたきっかけで間違って踏みはずしたら後々の代から「41代の執行部は最悪だった。あいつらのせいで記念祭は終わってしまった」と言われるようなことも内心覚悟しながら、恐る恐るやりました。
結果としては、内容的にはかなり充実した記念祭だったと思います。僕らは2回目なので、40回記念祭が終わった時点で、自分のパートではこんなことがしたかったとか、あんなことが本当はできたなとかいうことがうまくできました。
内容なんですけど、さっきかなりレベルを下げることに力を入れると言ったんですが、一致団結して楽しいことをしてくれとみんなに呼びかけました。２日目、ユニフォームのファッションショーをやりました。
デコレーションは審査１位とか２位とか決めるのに、ユニフォームは審査しないんですよ。デコレーションもしんどいけど、ユニフォームも女の子が頑張って作るのに、表彰もないんじゃさみしすぎるなというので、これも審査したいなと思ったんです。